報告

北欧とドイツの生涯学習と、徳島大学の「地域社会人を活用した教養教育」から見えてくる視点とは

大橋　眞・齊藤隆仁
（徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部）

概要：フィンランド、デンマーク、ドイツなど優れた教育の取り組みで知られる各国の研究者が、徳島大学全学共通教育の取り組み「地域社会人を活用した教養教育」に関して、どの様な意義を感じ、どのように発展していくことを期待するのかを調べる目的で、今回それぞれの国で活躍する生涯教育研究者を訪問して意見交換を行った。その結果、今回の徳島大学の取り組みに類似するプログラムはこれらの国にはほとんどなく、今後同様の取り組みに関して検討を始める意義のある新しい可能性を持った取り組みであるとする評価を得た。人に学ぶことを基本とする観点から、デンマークのホイスコーレの考え方に類似点があり、大学教育や教養教育の観点から連携を進めることにより、今回の取り組みをさらに発展させることが期待される。
（キーワード：教養教育　北欧　ドイツ）

A novel standpoint of view obtained from the current situation of lifelong study in north European countries and Germany in the combination with the program of Tokushima University ‘cultural studies utilized man of ability from the local community’

Makoto OHASHI, Takahito SAITO,
(Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima)

(Key words: General education, North European countries, Germany)

１．緒言

学士課程構築を進める上で、教養教育をどのように位置付けるかが、大学教育の特色を形作る要因として重要である[1)]。このために、今回の取り組みを、どのように発展させることが可能であるかを調べることは、意義があると考えられる。

フィンランド、スウェーデン、デンマークなどの北欧諸国とドイツなどのヨーロッパ諸国は、生涯教育や環境教育などで優れた取り組みを進めていることで知られている。これらの国で現在おこなわれている先進的な教育の取り組みや生涯教育の基本となっている考え方を調査することにより、GP に採択された徳島大学全学共通教育の取り組み「地域社会人を活用した教養教育」[2)]を発展させる道筋を探る目的で、本論文の著者らはフィンランド、デンマーク、ドイツの生涯教育の専門家を訪問した。これらの研究者に対して、今回の徳島大学の取り組み「地域社会人を活用した教養教育」を紹介して、大学教育と生涯教育の関係を議論した。また、ドイツにおいては、徳島大学の「地域社会人を活用した教養教育」で行っている体験型学習[3)]を取り入れた講義を、生涯教育を専門とする大学院生に対して行った。

本稿では、今回の活動の中から見えてきた新たな教育に対する視点について考察する。

２．取り組み紹介の方法

「地域社会人ボランティアを活用した教養教育」のパンフレット英語版を用いて、口頭で説明を行った。

また、一部の大学で、地域社会人ボランティアを活用した教養教育の意義に関する授業を、体験型学習の実演を取り入れながら行った。また、その後に各研究者から今回の徳島大学の取り組みに関しての意見を求めた。

３．取り組み紹介の実際と結果

３．１．フィンランド

ヘルシンキ中央駅近くに立地する、ヘルシンキ大学の生涯教育研究所であるパルメリアセンター

を訪問した(2009年11月17日午前９時)。パルメリアセンターは、生涯教育の新しいプロジェクトに関する実践的な研究を行っている。同センターの、Tuula Meres-Wuori、Ulla Pehrsson両博士から、同国における生涯学習の新しいプロジェクトの取り組みについての解説をいただいた。同国の生涯学習の取り組みで中心となっているのは、主として地域の自治体であり、その地域に居住する地域社会人に対して様々な分野の講座が用意されている。その内容は、受講生のレベルに合わせた多様なものがあり、受講生はわずかの受講料を負担するだけで、生涯教育を受けることが出来る。分野としては、リベラルアーツ系のものより、語学や特定の分野のスキルアップに関するものが多い。大学の授業における教養科目も日本より少なく、同国における高等教育の方針を示唆すると思われた。

また、同国において生涯教育の進んだ取り組みで知られるタンペレ大学を訪問した。タンペレは、ヘルシンキに次いで同国第２の都市であるが、こじんまりとした街の中心である駅の裏にキャンパスを広げている。冬の厳しい気候に対応出来るように、主要な建物は連絡通路で結ばれているが、生涯教育センターと教育学部は、独立した小さな建物にまとまっている。今回は教育学部の Eero Pantzar 教授を訪問した(2009年11月17日午後３時)。Eero Pantzar 教授は、同国でも有数の生涯教育研究者であり、多数の著書がある。「地域社会人を活用した教養教育」とフィンランドにおける生涯教育についての現状について報告し合った。今回の取り組みに関係する研究者を紹介いただいた後に、今後の共同研究の可能性について議論した。

３．２デンマーク

デンマークでは、フェン島の南部にあるヘルネス半島にあるヘルネスホイスコーレ（高等アカデミー）を訪問した。ヘルネス半島は、過疎化が進行し、現在人口200人ほどの住民が生活している。同島唯一の教育機関であった小学校が十数年前に廃校となり、その校舎を利用して創設されたのが、ヘルネスホイスコーレである。このホイスコーレは、主として生涯教育の場として、多くの社会人を受け入れている。全寮制で寄宿舎が完備されており、希望によりドミトリーと個室が選択できるようになっている。海外からの受講生も多く、その大部分はノルウェー、バルト３国、ハンガリーなどの近接する国からであるが、中には日本からの留学生も在籍したことがある。元小学校の建物の内部を改装して使用しており、教室や集会室、給食室、体育館などの設備は充実している。地域の住民にとっても、生涯学習の場として利用するだけではなく、健康維持のための屋内スポーツの場として、体育館を利用しているということであった。2009年11月19日午前10時に同校において、Kristian Kjaer Nielsen校長に直接お会いし、「地域社会人を活用した教養教育」の取り組みについて紹介した。その後で、同校の教室、給食室、陶芸と絵画のための特別教室、体育館などを見学し、その活用方法の説明を受けた。また、心理学の授業を見学した。さらに同校の在学生と共にランチ給食の時間に、同校での学びと学生生活について意見交換を行った。文化人類学の講座を体験受講させていただき、先生の専門であるグアテマラの文化についての講義で受講生との議論から、同講座のコンセプトを感じることが出来た。その後に教授宅に場所を変えて、同講座の受講生とともに先生のコレクションである中南米の民族衣装を手に取りながらの課外授業となった。同校の談話室の隣に同校の学生が自由にインターネットを検索できるように設置されているパソコンコーナーがある。校長の許可をいただいて、徳島大学でビデオ会議が出来るようにセットアップを試みたが、パソコンの性能に若干問題があり、今後の継続課題とすることになった。今後は、徳島大学の大学教育に携わっていただいている社会人、または学生がこのホイスコーレで夏休みに開催されている２週間のショートプログラムに参加することが最も身近な交流であると思われた。

３．３．ドイツ

ビーレフェルト市にあるビーレフェルト大学教育学部の Walfgang Jutte 教授を訪問した（2009年11月21日午前10時―22日午後６時)。生涯教育

学が専門で、大学院には生涯教育専攻が設置されている。教育学部には、様々な分野の教育に関するコースが設置されており、ドイツでも最も規模の大きな教育学部である。様々な分野の教育学を教育しており、日本の教育学部で最も数の多い教員養成課程とは様子が随分と異なっている。ドイツの生涯教育は、地方自治体が主体となって開設している講座が中心であるビーレフェルト大学自体は、生涯教育の講座を開設していないが、生涯教育の専門家を育成する大学院修士課程をおいていることから、生涯教育のシステム構築に関する専門家を育成することに力を入れているようである。ユースホステル発祥の地であるドイツでは、地方公共団体の運営するユースホステルも多く、学生の課外活動の場となっている。また、生涯教育の場としての活用もされている。しかし、スウェーデンやデンマークのような民間が運営する形式の生涯教育機関は少なく、地方自治体や民間団体が運営する生涯教育講座が中心である。生涯教育に関する研究もビーレフェルト大学では盛んにおこなわれており、徳島大学の今回の取り組みにも興味を持っていただいた。今回の訪問では、生涯教育を専攻する大学院修士課程の学生に対して授業を行った。授業の内容は、徳島大学の地域社会人を活用した教養教育に関するもので、取り組みの狙い、期待される効果、体験学習の実際、授業の成果をどの様に発展させるか、海外の大学との連携の実例から学ぶものに関するものである。授業あとで、授業内容に関してインタビュアから５つの項目（①この授業を始めたきっかけ、②社会人の役割、③学生は社会人参画の授業にどの様な印象をもっているのか、④社会人の職業、⑤どのようなカテゴリーの授業で行われているのか）に関しての質疑応答を行った。授業の内容は、同校のホームページからアクセスできるインターネットラジオでも放送された。このように徳島大学の成果に関しての広報活動は、大学間の連携事業として発展させることが出来たと思われる。

４. 北欧、ドイツの生涯教育に関する取り組みについて

今回の北欧諸国とドイツの高等教育機関の訪問で生涯教育に関する考え方で大きく２つのグループに分けられることがわかった。その一つはフィンランド、ドイツのように、地方公共団体や民間団体の運営する生涯教育講座が中心となっているもので、これに加えてフィンランドではヘルシンキ大学やタンペレ大学のような主要な大学で、大学が運営する生涯教育のための講座がある。二つ目が、スウェーデン、デンマークのように民間が運営する生涯教育機関が数多く存在する場合で、生涯教育の民営化とでもいうような形式を取っている場合である。このような、民営の生涯教育機関については、デンマークのホイスコーレが長い歴史を持っている。このような民営の生涯教育機関の発達を支えているのが、政府の補助金制度である。ホイスコーレは、本来は管理的な学校教育の中で疎外された若者を受け入れるための民間の教育機関としてスタートした経緯があり、現在も多くのホイスコーレがこのような若者を受け入れている。このために、知識を教え込み将来の資格等に繋げていくという思想とは異なり、自分が本来持っている隠れた能力を引き出すことが教育の本質であるという思想に立っているように思われる。現在も、このような多様な若い世代の教育機関として、ホイスコーレは重要な役割を果たしているが、生涯教育を中心として運営されている学校もある。このようにして、ボトムアップ方式の民間団体育成のシステムは、地方公共機関が運営する学校システムと異なり、ピラミッド型の管理システムが行き届かない面がある反面で、学校の独自性を発揮してユニークな発想の教育機関として成長する可能性がある。また、独自性の高い優れた発想の人材を輩出することが期待される。

５．ホイスコーレの目指すものと学校教育

ホイスコーレは、いわゆる学校教育とは異なり、試験というものが存在しない。ホイスコーレの教育を「生の教育」というのに対して、学校教育を「死の教育」という言い方がある[4)]。これは、ホイスコーレの教育が、共に学ぶことで人間の生きる意味を問い直すことを主眼としているのに対して、通常の学校教育が就職や進学のためというように、勉強そのものに生きる意味持たせることを

遠ざけていることに起因すると思われる。そのために、ホイスコーレでは、先生と学習者がテーブルを囲みながら対等な立場で対話をしながら授業を進めていくのに対して、学校教育は基本的に教員が学習者に対して高い立場から知識を教え込むことを基本としている。学校教育は、一人の教員あたり大量の学習者に対して教育を行うことが出来る教育の効率的なシステムであるが、授業の間は教員が学生に知識を伝えることが基本となる。そのために、学習者の学びに対する能動的な行為を引き出せるかどうかは、教員の力量に依存するところも大きい。また、能動的な行為に移行させるためには、自主的な課外学習が重要な意味を持っている。このような行為にまで学習者の主体性を引き出すことが出来る教育を行うためには、学習者に対してモチベーションを持たせるように、教育の目的を明確化する必要がある。

現在の教育現場では、試験を課すことによりモチベーションを高めることが日常化しているという現実もあり、モチベーションの本質について今後いろいろと検討するべき課題を残している。これに対して、ホイスコーレは本質的に主体的な学びを基本としておりモチベーションを持ったうえで授業に参加するために、試験を実施することは

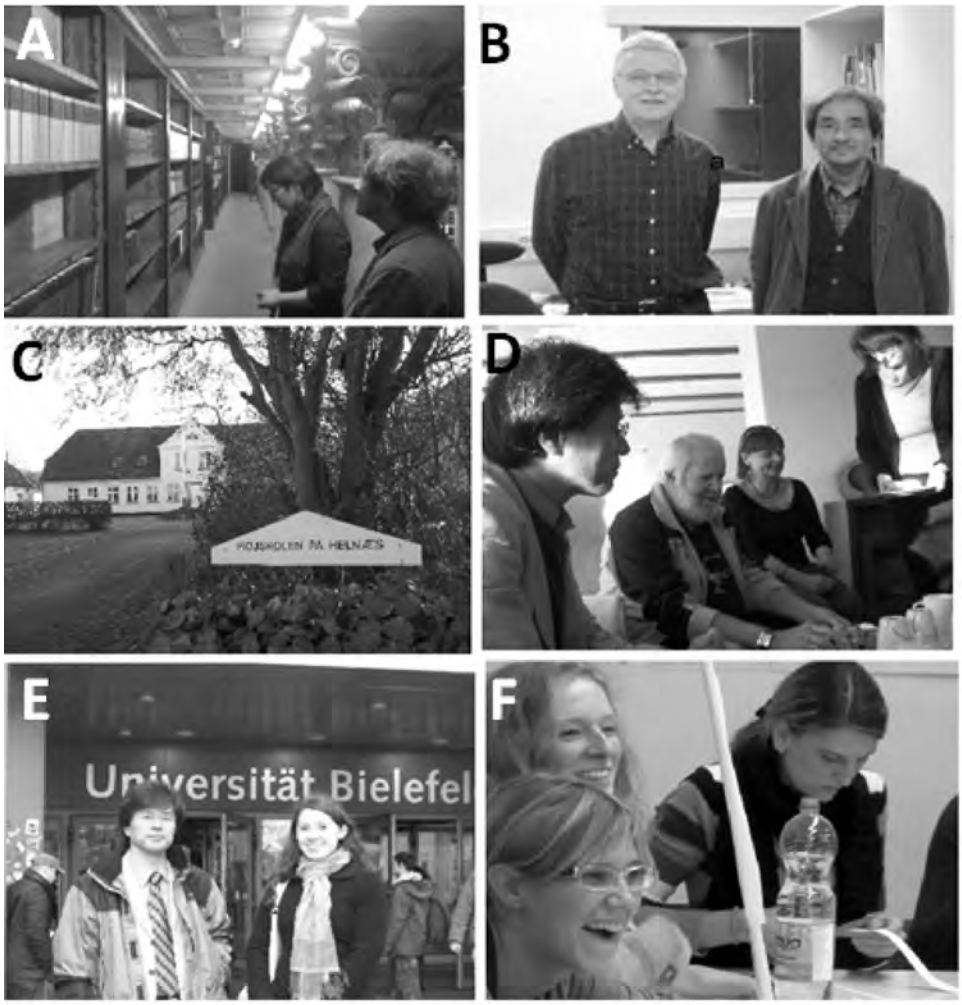

図１．北欧とドイツの高等教育機関における徳島大学の「地域社会人を活用した教養教育」の広報活動

Ａ：ヘルシンキ大学図書館　　Ｂ：タンペレ大学 Pantzar 教授の研究室
Ｃ：デンマークヘルネスホイスコーレ　　Ｄ：ペルーの民族衣装を手に取りながらの体験学習
Ｅ：ドイツ　ビーレフェルト大学　　Ｆ：ビーレフェルト大学における「徳島大学の新しい教育」に関する授業風景

モチベーションの方向性をゆがめることが懸念される。学ぶことが楽しいというモチベーションが、ホイスコーレの教育の基本である。

６．徳島大学の取り組みとホイスコーレとの関係について

徳島大学の「地域社会人を活用した教養教育」では、地域社会人が学生と共に机を囲みながら、あるテーマに関して議論を重ねることを基本としている[2)]。この場において地域社会人は、主体的に学ぶことをモチベーションとして参加しているが、学生のモチベーションは、必ずしも主体的な学びにあるとは限らない。むしろ、卒業に必要な単位取得のようなモチベーションで受講を決める場合も少なくない。このように、徳島大学の取り組みでは、モチベーションの異なる学習者が同じテーブルを囲みながら、議論を重ねて学習を進めることになる。今回の取り組みの授業では、学生がこのような状況下において地域社会人のモチベーションの背景に気づき、自分の学習に対するモチベーションについて考え直すことを主な目的にしている。これは、授業に参加することの根底となってきたモチベーションという基盤を、同じ机を囲んだ地域社会人という身近な他者の視点に気づき、その視点に至るさまざまな背景を考えながら、自らの問題点について原点に立ち返って考え直すという、様々な思考過程を必要とする。このような多くの段階のことを一気に学ぶことが可能となるためには、同じテーブルを囲む他者に興味を示すことが重要となる。また、学ぶことの面白さを実感することで、今後の学習に関するモチベーションの変化が期待できる。

７．人から学ぶことの意義に関して

デンマークのホイスコーレにおける学びは、「人から学ぶ」ということを基本的な理念としている。これまでの学習成果に知識を付け足すことは、インターネットでも可能である。知識の包括的理解のためには、本による情報を読み解くことがもっとも効果的な場合が多いように思われる。しかし、自らの思考の基準となっている考え方を、新たに考え直すことは、人から学ぶことが最も有効である。特に、生きることの意味を考えるような人間の思考の原点に関わる問題では、人から学ぶことが基本型となってくる。本に書かれた人の言葉がその代わりをすることもあるが、基本的には人との関係の中から考え直すきっかけが生まれてくることが考えられよう。このように、人から学ぶ場を設定するのが、徳島大学の今回の取り組みであり、授業に参加する学生に対して当初の受講のきっかけとしてきたモチベーションから、自発的に学ぶことへの興味に基づくモチベーションへと変換する課程に於いて、地域社会人が極めて重要な役割を果たすことになる。デンマークのホイスコーレも、さまざまな地域から集まった多様な経験を積んだ社会人が、お互いに学び合うという思想のもとに一つの机を囲むことにより、自分の求めていた教養ある地域社会人を見ながら、自らの経験に基づいた考え方を見直すきっかけになる面が大きいと思われる。

８．生涯教育と教養教育

教養とは何かと言うことに関しては様々な議論があるが、「良識ある市民として行動できる能力」という一つの見解がある。地域社会の中で、大学教育に造詣の深い方に大学教育に参加いただいて、次の世代に知の継承をおこなうボランティア活動を行う地域社会人に対して、良識ある市民の行動として感じる学生は多い。ホイスコーレに集まる各国の地域社会人は、様々な課題を抱えながらも、より自分らしく生きる道を探るために、お互いの学び合いの場である授業を作り上げることに情熱を傾けている。テキストなどは存在するが、知識を増やすことより重要なことは、その場に集う地域社会人を見つめながらこれまでの自分の姿に他者の人生を重ね合わせることで、自分らしさについての新しい視点を創造することにある。確かに知識を増やすことやスキルアップの生涯教育は重要なことではあるが、このような自分らしく生きる道を考え直すための生涯教育は、自分の教養を広げるために欠かすことが出来ないと思われる。同様に教養教育は、自分らしく生きる道を探るために重要な役割であり、この過程を通じて良識ある市民として行動できる能力を培うことが可能に

なると考えられる。その意味では、これまで一般的に行われてきた知識を増やすための生涯教育とは異なった趣旨を持った、自分らしく生きるための生涯教育は、教養教育と同一の理念を持ちうることが期待出来る。また、自分らしく生きるためのこのような生涯教育の一環として、今回の取り組みである「地域社会人を活用した教養教育」が利用されることにより、学生に対しても教養教育と生涯教育の繋がりに関する理解を深め、今後の生涯教育に対する考え方を人の行動を見て自ら学ぶことに繋がっていくことが期待出来る[2)、5)]。

９．生涯教育から見た大学教育

今回の徳島大学の取り組み「地域社会人を活用した教養教育」は、フィンランド、デンマーク、ドイツの生涯教育研究者から、大変ユニークな試みであるという評価を得ることが出来た。また、ドイツの生涯教育を専攻する大学院生に対して、徳島大学の取り組みに関しての授業を行うことで、生涯教育研究者だけでなく、学生に対しても今回の取り組みの意義を理解してもらうことが出来た（授業中の挙手により 100％の学生が意義を理解したとの意志を表明）。それと同時に、今回の取り組みの成果が注目されることになった。今後は様々な形で協力関係を推し進め、地域社会人を活用した教養教育による大学教育改革の成果が上がるような仕組みを導入すると共に、その結果として国際的な大学間連携や、デンマークのヘルネスホイスコーレの様な生涯教育機関との連携が深まっていくことが期待される。この過程を通じて、一つの地域から始まった一つの大学を中心とした知の循環型社会が、やがて世界にその輪を広げて、次世代の教育の姿を形作ることが期待される。

謝辞

徳島大学の取り組みについてご意見をいただきましたヘルシンキ大学 Tuula Meres-Wuori、Ulla Pehrsson 両博士、タンペレ大学 Eero Pantzar 教授、ヘルネスホイスコーレ Kristian Kjaer Nielsen 校長、ビーレフェルト大学 Walfgang Jutte 教授、Julia Behrens 氏、ホイスコーレ札幌　生越玲子氏に感謝します。

引用文献

１．文部科学省　中央教育審議会答申（2008）「学士課程教育の構築に向けて」

２．大橋　眞、中恵真理子、光永雅子、Steve T. FUKUDA、斎藤隆仁、菊池　淳、香川順子、廣渡修一（2009）「大学教育改革と教養教育−地域社会人活用による知の循環型社会構築に向けて」-『大学教育研究ジャーナル』 6:88-97

３．大橋 眞、斎藤隆仁、佐藤高則、中恵真理子、田村貞夫（2007）「ものづくり」と大学初年次教養教育における創造力育成プログラム」『 大学教育研究ジャーナル』　4:1-12

４．清水 満『生のための学校』14-202，新評論（1996）

５．大橋 眞、斎藤隆仁、佐藤高則、中恵真理子、田村貞夫、 Loise Mamaena Idu、（2008）「共創型授業における社会人活用の展開」『大学教育研究ジャーナル』　5:30-38